



TITLE:

バイオ・ソーシャル假説の意義 (特別號)
)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. バイオ・ソーシャル假説の意義 (特別號). 經濟論叢 1925, 20(1): 117-149

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128238>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 二 十 二 卷

大 正 十 四 年 一 月 一 日 發 行

特 別 號

地租と營業稅との <small>對立に關する</small> 考察……………	法學博士	神戸 正雄
西陣の機業仲間……………	經濟學博士	本庄榮治郎
朝鮮の農業金融組織……………	法學博士	河田 嗣郎
<small>往古に於ける</small> 上海と日本の史的關係……………	文學博士	新村 出
資本の社會的性質……………	法學博士	河 上 肇
ビオ・ソシヤル假説の意義……………	文學博士	米田庄太郎
産業集中 <small>に就ての</small> マルクス説の謬想……………	法學博士	田 島 錦治
金紙幣本位制……………	法學士	作田 莊一
水産資本融通問題……………	法學博士	山本美越乃
海運 <small>に於ける</small> 競争の運賃に <small>及ぼす</small> 影響……………	法學士	小島昌太郎
支那の帝政と支那の文化……………	文學博士	矢野 仁一
倫理と經濟との關係……………	法學博士	財部 靜治

ビオ・ソシヤル假説の意義

米田庄太郎

目次

- (一) ビオ・ソシヤル假説と現代社會學
- (二) ビオ・ソシヤル假説の要領
- (三) ビオ・ソシヤル假説の一般的評價
- (四) 社會と個人との發生的關係問題とビオ・ソシヤル假説

余は前々號に於て完結せる「フィアカントの社會學論」に續いて、「社會學と現象學」と題して本號よりフツサル一派の最近の現象學的社會學論を論究する積りであつたが、或雜誌に於て公にする「神秘主義の最深本質」を書く爲めに豫定以上の日數を費やしたので、本號の原稿締切日までに「社會學と現象學」第一回分を書き上げることが出来なかつた。それで十五六年前から大學の社會學普通講義に於て、余の常に重要視し來れる一假説にして、社會學の最も根本的な諸問題の研究に對して重大なる意義を有するもの、即ち「ビオ・ソシヤル假説」(Hypothese bio-social)に關する愚見を述べて、以て本號に對する余の責を果したいと思ふ。

(一) ビオ・ソシヤル假説と現代社會學

ビオ・ソシヤル假説と云ふ言葉は我國の社會學者間にありては、恐らくは余の講義を聞かれた

人々以外には、あまり知られて居ない言葉であるかと思ふ。此の假説の意味する實質的内容は種々なる形態にて、現今の社會學者間に汎く認められて居るに拘らず、ビオ・ンシャル假説なる言葉は歐米の社會學書に於ても一向用ひられて居ないからである。尙ほ此の假説の生國佛蘭西の社會學者間に於ても此の言葉はあまり用ひられて居ないと思ふ。夫れは此の言葉はあまりよく出来た言葉でないかも知れないが、併し余はより良き言葉を用ひし人あるを知らず、又余自身もより良き言葉を思ひ當らないので矢張り此の言葉を用ひることゝして居る。尙ほ余は日本語で適當な譯語を思ひ當らないから、佛蘭西の原語のまゝで用ひて居るのである。されど余は此の假説を大體上其の創說者とも見倣し得られる波蘭士の社會學者ヅ・ロベルチーの説くがまゝに承認して居るのでなく、之れに種々修正を加へて自説中にとり入れて居るのである。

余がヅ・ロベルチーの著「社會學」(De Roberly, La Sociologie, Essai de philosophie sociologique, 1880.)を一讀したのは、コント、スベンサー、リシンフェルト、シエフレ等を始め、多數の現代社會學者の説を學び、殊にタールド、ヅエルケム、ジムメル、ギッディングス等の説を研究して、かなり自説を纏めかけて居た際である。尙ほ其の前にイヅレーの著「近代都市」(Jzoulet, La cite moderne et métaphysique de la sociologie, 1894)を一讀して、ビオ・ンシャル假説なる言葉をも知つて居た。そうしてかなり興味を感じて居たが、併しさほど重要視しては居なかつたのである。

然るにツ・ロベルチーの「社會學」を一讀した際には、此の假説が自分の立場に對して甚だ重大なる意味を有するものなるを強く感じた。そうして夫れより此の假説に對して大なる興味を感じ始め、ツ・ロベルチーの他の諸著作をも閱讀したのである。

余は多數の現代社會學者の説、殊に心と心との相互作用或は相互關係（余の解するが如き廣い一般的な意味に於てか、又は意志と意志との結合とか、或は思想と思想との結合とか、或は感情上の結合とか、或は本能又は其他の本有的傾向によりて起る結合とか云ふが如き、狭い偏局的な意味に於てか）を以て、根本的元素的な社會的事實と認める社會學者の説は、總て根本的には一先づビオ・ソシヤル假説の如きものに還元して考へらるべきものと考へて居る。かくて余は此の假説を自分の立場に對して重要視するのみならず、現代社會學の發達上、根本的に甚だ重大なる意義を有するものと認めて居るのである。

それで余は本論文に於て、先づツ・ロベルチー自身のビオ・ソシヤル假説なるものは、如何なるものであるかを述べ、次に之を一般的に評價し、そうして終りに特に社會學上の最とも根本的な一問題即ち社會と個人との發生的關係問題に就て、此の假説の意義を指摘して見たいと思ふ。

(二) ビオ・ソシヤル假説の要領

今ビオ・ソシヤル假説なるものは、上に述べし如く波蘭土の社會學者ヅ・ロベルチーによりて始めて組織的に詳しく展開されたものである。それで大體上彼を以て此の假説の創設者と見做してもよいかと思はれる。併し夫れは決して此の假説は全然彼によりて新たに創説されたと云ふのではないので、彼の師事せるリトレーも既に其の太要は説いて居たし、更にリトレーの師コントの說の中に明らかに其の芽が見出し得られるのである。それで此の假説の發達を其の始源から詳しく究明せんとするに於ては、吾人は先づコントの說に於ける其の芽を探究し、次に夫れがリトレーによりて如何程育成されかたを吟味し、終りにヅ・ロベルチーの說に進んで行かねばならぬのであるが、此處には其の暇はないで直ちにヅ・ロベルチーの說に就て述べることにする。

先づヅ・ロベルチーは如何なる動機からして、此の假説を特に詳しく論究するに至つたか云ふに、夫れは社會學との關係に於て心理學の科學的性質を明確に決定せんとする動機からであつた。そうして夫れが爲めに彼は心理的現象の本質を深く究明せんと企てたのであるが、其の際に彼はビオ・ソシヤル假説を詳しく論究するに至つたのである。されば彼は此の假説を始めて詳しく論述して居るのは、彼が千八百八十年に公にせる著書「社會學」第十章「社會學と心理學との關係」に於てである。（但し同章は彼がさきにリトレーの機關雜誌「實證哲學」に於て公にせる一論文に、多少修正を加へたるものであるから、彼は同書に先だちて既に同假説をかなり詳しく論述

して居たのである。〕そして彼が同章に於て同假説を詳しく論述するに先だちて述べて居る左の言葉は、彼の同假説の主旨を簡明に云ひ表はせるものと思はれる。

「心理學の對象は何であらうか。夫れは云ふまでもなく心理的現象である。併し心理的現象とはつまり感覺し思考し意欲する人間に外ならない。そして事實を想像と混同することなくば、此の心理學的人間なるものは原因に非ずして結果、因素に非ずして生産物であること、更に其の眞實な原因は生物學的條件と社會的條件であることを、推察するを妨げる何物も存在しない。或哲學者の云へる如く、孤立せる生物は決して思考する生物、理性的生物でないであらう。更に此の生産物は歴史を有し進化をなせるものである。かくて歴史前狀態の心理的現象があり、又夫れに續いて現はれた心理的現象、及び其後長い年月を経て現はれた心理的現象がある。

今其等二種の心理的現象の何れが、心理學によりて研究さる可きか。若し夫れが第一種の心理的現象であると云ふならば、人々は之れに答へて其等の心理的現象に於ては、原始的な社會的條件も一定の影響を及ぼして居るが、併し明らかに大なる勢力を振ふて居るのは生物學的條件であると答へるであらう。之れに反して夫れは第二種の心理的現象であると云ふならば、人々は今度は社會的條件が明らかに重大なる役目を演じて居ると抗辯するであらう。言語による觀念の交通、文書技術品藝術品及び其の他幾百の傳達の符號或は答號及び途による觀念の傳達、口語的文

學的藝術的及び科學的傳説の複雑なる事實、情操慾情及び利害心の社會的衝突及び鬭爭、社會的指導政治等の無數の制度、此等のものは相錯綜せる社會的諸勢力の廣大なる一系列を作り、そうして生物學的條件と密接に結合して、以て心理的現象即ち心理的運動或は表現と云ふ結果を生ずるのであるが、然るに其等の心理的現象は最も注意周到に行はれる觀察さへも、只其の同類との恒常的團結の狀態に於て生活する人間に於てのみ、發見する處のものである。されば心理學は例へば化學が生物學との關係に於て、又物理學が化學との關係に於てあるが如く、直ちに其の上に位する科學、社會學から獨立する一科學として決して考へらる可きものでなく、之れに反して社會學の一附屬物一延長として、又只社會學が其の充分なる發達に達した時にのみ、一の構成された科學となり得る一研究として、見做され得るものである。されば心理學の進歩の遅々たるは社會學の進歩を後れさせた一原因と見做さる可きものでなく、却て社會學が現に見るが如き幼稚な狀態にあることの單純なる結果と認められねばならぬ。」p.p. 187 et 188.

ゾ・ロベルチーの右の語は、彼のビオ・ソシヤル假説の主旨を簡明に云ひ表はせるものと思はれるが、要するに彼のビオ・ソシヤル假説と云ふは、つまり心理的現象は孤立せる生物或は人間に於て自發的に發達するのではなく、生物(bio)殊に人間が社會或は團結(social)をなして生活するに於て、此處に始めて社會的條件と生物的條件との密接なる結合の產物として產出され發達するも

のなるを意味するのである。ヅ・ロベルチーは他の場處で又左の如く述べて居る。「余輩の假説はつまり思想及び感情の超有機的事實を、生物學的現象としてゝも亦社會的現象としてゝもなく、況んや普通に解される意味に於ての心理的現象としてゝはなく、併し生物的社會學的現象 (Phénomènes bio-sociologiques) として、詳言すれば物理化學的現象の一定集團^{グループ}(例へば地質學的集團及び氣象學的集團の如きもの)が、無機的世界に於て認められると同様な役目及び科學的價值を、有機的世界に於て演じ又有する處の現象として見做さんとするのである。」p.194.

ヅ・ロベルチーは上に述べし簡明なる説述に次で、彼のビオ・ソシャル假説を詳しく論述して居るが、併し彼の同假説の最も圓熟せる論述は、彼が其の後二十三年目、千九百三年に公にせる著書「社會學新綱領」(Nouveau Programme de Sociologie)第二章「超有機的現象の性質に關する一假説」中に見出されると思はれるから、余は此處に右の章によりて、彼の社會現象本質論に結び附けて、彼の同假説の大要を述べることにする。但し余がさきに述べし如くに、彼のビオ・ソシャル假説を重要視するのは、是れ其の中に彼の社會現象本質論を含ませて考へての事である。彼の同假説の眞價は、實に其の中に彼の社會現象本質論を含ませて考へるに於て、始めて十分に發揮されるものである。そうしてヅ・ロベルチーも亦當然之を含ませて考へて居たと思はれる。かくてビオ・ソシャル假説は直接には心理的現象の本質に關する心理學的一假説であるが、併し其の中

にヅ・ロベルチーの主張するが如き社會現象本質論を含むに於ては、社會現象の本質に關する重大なる社會學的基本假説となるのである。余はビオ・ソシヤル假説の眞意を此の如くに解して居るのである。併し此の如くに解するに於ては、ビオ・ソシヤル假説はヅ・ロベルチーの唱道せるもとの意味に種々修正を加へねばならなくなるのであるが、此の點に就ては次節に於て、同假説を批判的に考察する際に述べることにして、本節に於てはヅ・ロベルチーの思想を、彼が「社會學新綱領」に於て論述して居る其の最も圓熟せる形態に於て、簡単に説述することとする。

ヅ・ロベルチーの論述する處によれば、超有機的現象或は社會現象は先づ三つの特徴を示して居る。(1) 夫れは今尙は明白には究明されて居ない一定の條件によりて、潜在的から顯在的になり、そして甚だ小數の生物種に於て現はれて居ること。(2) 夫れは人類以外の生物種にありては、全く本能的な随ふて停滯的なものであるが、人類にありては只僅かに本能的であつて、大部分に於ては意識的或は思慮的であり、そして變化し得るもの、發達し得るものであること。(3) 夫れは何處に於ても「自」(生物學的個體)と「他」(一般に同じ生物種に屬する諸個體)とを對立させ、兩者の間に豊富な結果或は關係を產出する恒常的相互作用を行はしめること。此の(3)の點は超有機的現象の根本特性として特に重要なものにして、吾人は之を詳しく究明することによつて、超有機的現象の本質を始めて十分に理解し得るのである。

今「自」と「他」との無限に反復される對立は、「自」及び「他」の意識の二系列の上に強く作用し、之を根本的に變化させるに至る。かくて永く相接觸し相交通する心意に於て、甚だ相類似する感覺知覺表象及び其結果として甚だ相類似する情緒慾望意志等が現はれて居る。共同生活と總稱される諸條件に相共に従ふことに依て、孤立する諸腦髓に於て散在する腦髓的力は、種々なる仕方にて相互に交叉し連合し結合する。夫れよりして生物的「多」が超有機的或は社會的「一」となる。

心と心との此の結合は始めは甚だ弱いものである。併し後には益々發達し益々強まる。かくて超有機的現象は宇宙間に於て重大なる地位を占め、重要な役目を演ずるに至る。超有機的現象は最も豊富なる事實によりて、宇宙間に顯現するのである。併し其等の事實は最後の分析に於ては、總て二種の原因より生起するものなることが發見される。(一)は尙ほ根本的には大に有機的性質を具有する處の單純なる意識狀態によりて、心と心との間に行はれるもの、即ち元素的なる腦髓的相互作用にして、精神物理的或は心理的生理的相互作用と稱し得られるもの、(二)は混合的或は複合的性質を有する意識狀態によりて、心と心との間に行はれる相互作用にして、前者から區別して心理學的相互作用と稱し得られるものである。但し其等の複合的な意識狀態は(一)の直接の又増長する影響の下で生まれ進化するものにして、つまり(一)と純有機的諸形質との協働の生産物と認め得られるものである。

超有機的現象は其の深い根柢をなす所の精神的物理的過程から區別されると同じく、又夫れと生命的諸形質との密接なる結合の直接生産物として現はれる心理學的過程からも區別される。そうして夫れは常に生命的現象に後續して、心理學的現象に前行する。かくて吾人は超有機的現象を一の特別なる現象部類として、現象の他の諸部類から明らかに區別し得るのである。又夫れによつて社會學は一の自律的科學として建設され得るのである。

既に述べし如く、超有機的現象は一又は幾多の腦髓に於て生れたる觀念、情操、情緒、慾情等が、他の腦髓に於て生れたる其等のものゝ上に及ぼす處の、特異な又強大な作用によりて現はれるのである。併しかゝる作用は心理學的過程が原因にして、超有機的現象は其の結果であると云ふ意味を含むものでない。否、超有機的現象は常に心理學的事實に前行し且つ之を決定するのみならず、更に總ての關係に於て常に心理學的相互作用にも前行し且つ之を決定するのである。是れ超有機的現象は心理學的相互作用として現はれる前に、既に單純なる精神物理的相互作用として現はれるからである。

されば心理學的事實は純然たる腦髓的生理的事實でも、亦一切の社會現象の説明の最後の鍵となる單純な元素的な事實でもなく、夫れは一の複合的な事實、ピオ・ンシャル事實である。かくて超有機的現象は心理學的社會學の主張するが如くに、心理學的事實の結果では有り得ないのである。

で、随ふて夫れ自身獨立な原因を有せねばならぬことは明らかである。そうして其の原因を社會性 (socialité) と稱するのが、最も穩當であらうと思はれる。

今超有機的現象は本質的には常に精神物理的相互作用か又は心理學的相互作用かの現象であるが、併し吾人は之を三つの異なる仕方で考察することが出来る。(一)は之を有機的現象からも亦無機的現象からも區別して考察することにして、(二)は之を只有機的現象にのみ結び附けて考察すること、(三)は之を有機的及び無機的兩現象に結び附けて考察することである。第一の場合に於ては吾人は超有機的現象を一の抽象的事實として考察するのであるが、他の二つの場合に於ては之を一の具體的事實として考察するのである。そうして其等二重の具體的方面に就て、吾人は(二)の場合に於ては心理學的事實及び過程の大量を見出し、又(三)の場合に於ては歴史的或は現在的なる事實及び過程にして、一般に社會的と總稱されるもの、無數を見出すのである。社會學者は(二)の場合に於ては、二種の抽象的要素即ち生命と原始的社會性(全く精神物理的相互作用から成り立つもの)との親密なる結合及び融合を洞察し、(三)の場合に於ては、三種の抽象的要素即ち擴大されたる社會性と生命と器械的エテルギーとの共存及び結合的活動を觀破する。此處に又最も複合的なる社會的事實と、其の最後の生産物或は其の最も特殊的にして最も具體的なる表現たる社會的個人とが、世界の最も豊富なる縮圖として見出されるのである。

併し社會學者は超有機的現象の具體的方面を研究するに於ても、心と心との相互作用の法則の深奥なる知識を獲得することを特別な目的とする。それよりして社會學者は、此の相互作用が宇宙的エネルギーの他の基本的二方面即ち生命及び器械的エネルギーと結合して、最も著しく又強く現はれる事實、即ち正當に社會的と稱せられる事實の吟味に殊に力を注ぐ。そうして其等の事實の總體は「社會自然史」(*l'histoire naturelle des sociétés*)と稱せられる廣大なる一範域を作る。是れ社會學者の研究する主要なる範域である。併し其の唯一の範域でない。と云ふのは社會學は又より單純なる心理學的事實の方面をも探究せねばならぬからである。社會學者は個人意識の内容を吟味して、其の中から其の構成要素の一たる精神物理的相互作用をとり出し、特に之を研究せねばならないのである。併し夫れは心理學者の任務と混同されてはならぬ。

心理學者も同一の具體的現象を對象となし、同じく個人意識の内容を探究するのであるが、併し其の見地は異なつて居る。心理學者は社會學者の如く、個人意識を其の外部的及び相互的關係に於て、又かゝる關係が物體化して著しく外部に表現する事實に於て考察するのでなく、其の内部的關係に於て研究し、之を詳しく解剖して思考の機制の最も内面的なる原動力を發見し、思考の固有の形態及び進歩的或は退歩的進化を説明せんとするのである。心理學者は社會學と同一の實在を對象とするが、しかも社會學とは全く異なる仕方て之を取扱ひ、又其の目的に應じて

社會學者とは異なる方法を使用する。要するに社會學は抽象學にして隨ふて本來歸納的な科學であるが、心理學は具體學にして隨ふて必然的に演繹的な科學である。そうして此くの如くに見ることによりて、兩者の區別及び其の關係が始めて正當に理解されるのである。

心理學と稱せられる元素的な具體的社會學の將來の進歩は、上に述べし處によりて察知される如く、抽象的社會學によりて發見される處の、超有機的現象の最も一般的なる法則に特に依存するので、そうして其等の法則が精密に確立されない以上は、心理學は只一種の經驗的な皮想的な知識の團塊であるだけに止まり、科學としては到底完全に構成されることが出来ないのである。夫れは又具體的社會學の他の學科即ち社會自然史に就ても同様である。社會自然史も社會團體の自然科學として立派に構成される爲めには、矢張り其の抽象的基礎即ち心と心との相互作用を支配する本質的法則の知識の上に、建設されねばならないのである。

尙ほ宇宙全體の構造の總觀から見て、社會的或は超有機的現象と心理學的現象との差別及び關係、隨ふて社會學と心理學との差別及び關係を考察して見よう。夫れ宇宙は同心的三球から成立して居ると考へ得られる。其の外球は物理化學的現象を包拓するものである。そうして其の内部に、先づ有機體化と稱し得られる過程から產出される生物學的現象を包括する生物學的球が存在する。更に其の内部に最内球として、社會化と稱し得られる過程から產出される社會的或は超有

機能的現象を包括するもの、即ち超有機的或は社會的球が存在する。要するに器械的球の中に有機的球が存在し、又其の中に超有機的球が存在するのである。そうして外球から内球への轉化は、唯一であるが併し二重の方面を有する基本的過程によりて成就される。其の基本的過程は本質的には一の相互作用である。夫れは先づ器械的現象の一定の構成部分間に行なはれ、次に其の結果として現はれ形成される現象の一定の構成部分間に行なはれる。そうして前の場合に於ては有機的現象が生まれ形成され、後の場合に於ては超有機的現象が生まれ形成される。かくて前の場合即ち生物學的球に於て其の抽象學或は基本學として生物學が成立し、後の場合即ち超有機的球に於て矢張り其の抽象學或は基本學として社會學が成立するのである。

然るに社會學の對象たる超有機的現象内に於ては、集團心理學的現象と個人心理學的現象とが、明らかに區別されねばならぬ。前者に於ては個人に於て散在する精神物理的要素を接觸せしめ結合せしめる相互作用は、種々なる集團心を産出し、かくて其等の集團心に相應する夫れ夫れの社會團體の形成を指導する。そうして此の社會化は明白に殊に直接的に現はれる。又此の場合に於ける進化的過程は或意味にては第一次的で單純で自發的である。夫れは只常に又何處でも其の進行を規制する一般的條件に依存するだけである。集團心理學は又抽象的社會學の本質的諸分科間に容易に地位を見出すのである。

然るに個人心理學的現象にありては大に異なつて居る。心理學的事實は只既に他の腦髓と結合せる腦髓に於てのみ產出されるのである。換言すれば心理學的表現は必然的に一又は幾多の心意、一又は幾多の集團心の存在を前定する。(但し其の集團心は其の姿に従ふて個人の心意を形造る)。されば此の場合に於ては、社會性は一層一般的な又單純な條件に於て始めた其仕事を、只繼續し完成するだけである。但し心理學的事實に於ては、心的相互作用は直接に行なはれるのでなく、集團心の媒介によりて行はれるのである。かくて心理學的事實は本來派生的な現象にして、第二次的及び複合的一進化の當體となるものである。そうして心理學は派生的具體的科學である。

今右に述べし如く心理學の具體的性質を承認することは、抽象的社會學より心理學的事實を全く排斥することを意味するものでない。心理學的事實は集團的に止まるか又は個人的となるかを問はず、社會學全體の諸範域に充滿して居る。只社會學は心理學とは異なる見地から之を考察するだけである。尙ほ社會學は個人心理的現象を、其の研究の主要對象たる倫理的社會的進化の最高表現及び最も貴重なる結果として考察する。更に吾人の心意が本來目的論的構造を具有することは、社會學者をして個人心理的事實に合理的意義を認めしめ、之れに吾人の意志及び行動を決定する動機或は必然的條件の性質を賦與するに至らしめる。かくて個人心理的事實は社會學

者の目には、行爲と云ふ名で知られる社會的事實の特別なる一部類を産出させ得る終極原因の一
系列に化成する。換言すれば主觀的或は個人格的な心理學的事實が、客觀的及び科學的社會學に
於て、「社會的因素」の意味を獲得するのである。

ヅ・ロベルチーの社會現象本質論及びビオ・ソシヤル假説の要は、以上述べしが如きものであ
るが、余は是れより次節に於て先づ之を一般的に評價し、次にさきに述べし如く、特に社會と個
人との發生的關係問題の正當なる解決に對するビオ・ソシヤル假説の意義を論じて、特殊的に現
代社會學に於ける其の意義の一斑を指示したいと思ふ。

(三) ビオ・ソシヤル假説の一般的評價

此處にヅ・ロベルチーの社會現象本質論及びビオ・ソシヤル假説の一般的評價を試みんとするに
當つて、便宜上先づ彼の根本思想を余の解するがまゝに簡單に述べて置くが、要するに彼の根本
思想は先づ左の數項に包括し得られるかと思ふ。

- (1) 超有機的或は社會的現象は、生物と生物との接觸に於て生命の力の特に強まれる自然的結果
として行はれる相互作用によりて産出され、生物學的現象に直ちに連續して發現するもので
ある。

(2) 其の相互作用は原本的には、精神物理的相互作用である。されば超有機的現象は其の原始的な形態に於ては、精神物理的相互作用の産物である。随ふて夫れは原本的には精神物理的性質のものである。

(3) 精神物理的相互作用と生物學的諸形質との結合によりて、相互的に關係する生物或は人間の心意が段々發達して、高等なる心意作用及び狀態が產出される。

(4) 高等なる心意作用及び心意狀態が發達することによりて、人間と人間との間の相互作用は益々心理學的となる。かくて精神物理的相互作用の上に心理學的相互作用が行なはれてくる。

(5) 夫れによりて超有機的或は社會的現象は、益々發達し益々心理學的となると共に、又人間の人格性が益々發達する。

(6) かくて人間の心意は自然に獨立に發達するものでなく、社會的條件の下に於ける生物學的諸形質の發達として生まれ、又社會的關係の下に於て益々發達するものである。

ヅ・ロベルチーの根本思想を右の如くに見ることは、或はあまり余自身の見解に引きつけて見る恐れがあるかも知れない。併し少なくとも余自身は彼の根本思想は右の如きものであると解して、彼の説の重要を認めて居るのである。尙ほ余は右の諸項を彼から始めて學んだのではなく、彼の説に接するに先だち特にタールド、ジムメル、ヅュルケム、ギツデイングス等の説を、深く推

し究めて大體上同様な見解に到達して居たのである。併し彼の説に接して余は大に自説を確かめることが出来たのである。殊にタールド及び其他の諸家の説を深く推し究め行きて余の始めて到達し得たる見解を、彼が其等の諸家に先だち千八百八十年以前に既に説いて居た事は、余が彼に對して最も感服する點である。タールド及び其の他の諸家の説を深く推し究めて行かば、恐らくは何人でも同様な見解に到達し得るであらうと思はれるが、併し其等の人々に先だちて彼が既に其の見解に達して居たことは、實に彼の頭腦の甚だ優秀なるを證示するものであると思はれる。余は十數年間の努力によりて、今日見るが如くに我國の社會學界に於てタールド、ジムメル、ゾウルケム等の學説の價值を承認させるに至つた關係上、此處に又ツ・ロベルチーの根本思想の價值を宣揚する義務があると感じて、本論文を公にした次第である。

却説余はツ・ロベルチーの根本思想は上に述べしが如きものであると見て、大體上之を承認して居るのである。否な余の見解を裏書せるものとして大に尊重して居るのである。併し其等の根本の見解を基礎として夫れ以上に進むに當つて、余は彼と種々見解を異にして居るので、そうして詳しく事は遠からず出版し始める拙著「社會學體系」中に論述する考へであるから、此處では只彼のピオ・ソシャル假説の根本的主旨から見て、特に重要と認めらる可き彼の心理學論及び心理的現象本質論に關して、少しく批判的考察を加へるだけに止めて置く。

前節中に述べし處によりて知られる如く、彼のビオ・ソシヤル假説の主旨は、つまり心理學的或は心理的現象(彼の殊によく用ひて居るのは心理學的と云ふ語である)はビオ・ソシヤルなもの、即ち社會的條件と生物學的條件との結合の生産物にして、生物に於て自然に獨立に發生し發達するものでないこと云ふに在るのである。然らば彼が心理學的現象と云ふは如何なるものであるかと云ふに、彼は之を精神物理的或は生理的心理的現象から區別して居る。つまり彼は一般に心理的現象と稱せられて居るもの、中から、精神物理的現象を除き去り夫れ以外のものを、特に心理學的現象と稱して居るのである。要するに彼が特に心理學的現象と稱するものは、比較的に高等な或は複雑な心理的現象以上のものを意味するのである。そうして心理學的現象を此の如きものと見れば、夫れはビオ・ソシヤルなものであることは今日では何人も疑ふまいと思はれる。併し彼がかゝる見解を唱へ出した時代に於ては、夫れは確かに彼の卓見であると云はねばならぬ。そうして其の後の社會學の發達は、益々彼の見解を確かめて居るのである。併し余が第一に問題としたいのは、彼が特に精神物理的現象と稱して心理學的現象から除き去つて居るものも、其の多數は矢張り本來ビオ・ソシヤルなものと認めらる可きものでないかと云ふことである。つまり彼のビオ・ソシヤル假説は、先づ第一に不徹底でないかと云ふ問題が起るのである。就ては先づ彼が精神物理的現象或は生活と稱して居るものは何であるかを、明らかに決定せねばならぬ。

彼のビオ・ンシャル假説に於ては、前節中に述べし處によりて知られる如く、精神物理的現象と心理學的現象とを判然區別し、両者を對立させて考へることは、根本的に甚だ重大なる一原則となつて居るのである。然らば彼が精神物理的現象と稱するは如何なるものであるか。彼は其の著書「社會的心意生活」(Le psychisme social, 2e Éd. 1897.)の中に、生命或は生活の一般性を概論する際に左の如く述べて居る。

「有機的生活は抽象的には昂奮性或は感受性及び收縮性或は可動性、單純なる神經的筋肉的活動に分解される。そうして夫れは高等なる階段に於ては、腦髓的或は精神物理的生活に展開する。……腦髓的生活は昂奮性及び收縮性が感覺、單純なる元素的な表象及び所謂意識的或は反省的行動となる其の點から始まる。」p.p. 106 et 107.

是によりて見るとツ・ロベルチーの精神物理的或は生理的心理的生活と云ふは、つまり心理的作用の初發状態を伴ふ生理的な生活、或は純生理的有機的生活から心理的生活へ踏み出す第一歩である。そうして彼の云ふ處の精神物理的生活なるものは嚴密にかゝる意味に限られて居るものならば、夫れは大體上に於て社會前的なもの、超有機的現象以前のものと認め得られると思ふ。そうして又彼が精神物理的相互作用と稱するものは、かゝる精神物理的なものゝ相互作用として、原本的なる超有機的現象(即ち心理學的現象を産出する社會的條件となるもの)を産出する根

本作用であると大體上認め得られる。併し彼は精神物理的現象或は生活を常にかゝる意味に限りて考へて居たのであるか。余はそうでないと思ふ。彼は更に之をより廣い意味にも用ひて居たと思ふ。そうして夫れよりもより廣い意味に用ひられたる場合の精神物理的なものは、矢張りビオ・ンシヤルなものであると認めねばならないと考へる。

然らばヅ・ロベルチーはより廣い意味に精神物理的現象を解する場合には、夫れによりて如何なるものを表示して居るか。彼は直接に之を明言して居ないが、併し彼がビオ・ンシヤルな心理學的現象が、依て以て産出される社會的條件と認める處の原本的な超有機的現象と稱するものによりて、余は之を明らかに推知することが出来ようと思ふ。然らば彼が原本的な超有機的或は社會的現象と稱するものは、如何なるものであるか。彼は之を詳しく組織的には論述して居ないと思ふが、併し其の實例として列擧して居るものは、兩性的家族、幼兒の養育、動物社會の模倣性、停滯的社會の群集性^{グレガリウム}等である。是れによりて見ると、彼が原本的な社會的或は超有機的現象と稱するものは、つまり一般に社會學者が本能的團結或は本能的社會の現象と稱して居るものである。そうして夫れより推して、彼がより廣い意味に用ひて居る精神物理的現象と云ふは、主として本能現象を意味するものなるを察知し得られる。隨ふて又彼の精神物理的相互作用なるものも、主として本能的相互作用を意味するものなるを察知し得られる。

今ヅ・ロベルチーが精神物理的現象と云ふは、より廣い意味に於ては右に述べし如く、主として本能（詳しく云へば本能及び其他の本有的傾向）を意味するものとすれば、かゝる意味の精神物理的現象なるものは、矢張りバイオ・ソシヤルなるものであると云はねばならないかと思ふ。是れ余は本能、少なくとも社會的關係を産出する本能は、總てバイオ・ソシヤルなもの（即ち生物學的形質或は有機的生活が、生物と生物との相互作用の下で發展する結果）であると考へるからである。余は勿論總ての本能に就て云ふのでないが、少なくとも社會的關係を産出する一切の本能に就ては、夫れは單に有機的生活が自然的に獨立に強まる結果として産出されるのではなく、生物と生物との相互關係の下で、相互に他の存在を必要條件として發生せるものであると、云ひ得られると思ふ。此處に詳しく論ずることは出来ないが、要するに余は少なくとも社會的關係を産出する本能の社會的起源を認めるものであるから、ヅ・ロベルチーがより廣い意味に用ひる精神物理的現象なるものは主として本能を意味するものとすれば、夫れは矢張りバイオ・ソシヤルなものであると考へねばならぬと思ふ。

右の如くに考へると、ヅ・ロベルチーのバイオ・ソシヤル假説は先づ其の不徹底な點に於て修正されねばならぬ。そうして廣義の精神物理的現象も矢張りバイオ・ソシヤルなものど見るに於ては、彼の如く心理的現象のバイオ・ソシヤル性を證明する爲めに、人爲的に心理的現象の概念を特に狭

く限定する必要はなくなる。普通に心理學者の用ひる心理的現象の概念、即ち廣い一般的な意味に於ても、心理的現象は大體上ビオ・ソシヤルなものであると云ふことが出来ると思ふのである。

併し余も心理的現象は其の一切の精神物理的現象を含める最廣義に於ても、全然ビオ・ソシヤルなもの、全然生物的社會的生産物にして、隨ふて社會的現象は絶對的に心理的現象に先き立つもの或は前行するものと云ふのではない。さきに述べし如くヅ・ロベルチーが最狹義に解する精神物理的或は生理的心理的生活は、大體上社會前的なもの或は超有機的現象以前のものと見做し得られる、否な見做さる可きものと考へるのである。そうして余は其等の精神物理的或は生理的心理的現象を基礎として、社會現象も亦心理現象も共に發生するものと見るのである。要するに余は心理的現象と社會的現象との間には、論理的にも亦時間的にも前後の差別は存在しないので、兩者は共に最狹義の精神物理的或は生理的心理的現象を基礎として、相互的影響の下で同時に相伴なふて發生するものと考へるのである。尙ほヅ・ロベルチーが最狹義に解する精神物理的生活は大體上社會前的なものと見做し得られると云ふのは、是れ彼の云ふ最狹義の精神物理的生活も、少しく複雑なものになると矢張り生物と生物との相互關係の影響を受けて發現して居ると思はれるからである。

今以上述べし如くに心理的現象と社會的現象との發生的關係を解するに於ては、更にツ・ロベ
ルチーの如くに社會學と心理學との關係を、社會學は抽象的基本的科學にして心理學は具體的派
生的科學であると云ふ様に解するものも亦、一般に心理學的社會學派と稱せられる人々の如くに、
其の關係を心理學は社會學の基礎科學であるとか、或は社會學は應用心理學の一種であるとか云
ふ様に解するものも、共に謬見であることが覺られるのである。余が上に述べし見解に従ふて此の
關係を論斷すれば、社會學が心理學の基本科學であるのでも、亦心理學が社會學の基本科學であ
るのでもなく、兩者は相平行する同列の基本科學であるのである。

余は尙ほ色々論述したいことがあるが、併し本論文があまりに長くなるのを避ける爲めに、此
處では以上述べしぐらひに止めて置きたいと思ふ。尙ほ次節に於ては、余の修正した意味で、ピ
オ・ンシャル假説が、社會學上如何に重大なる意義を有するものであるかを示す爲めに、此の假
説の上から見て社會と個人との發生的關係問題を論究せんとするのであるが、是れも矢張り同じ
理由によりて、出来るだけ簡單に論述するに止める。

（四）　社會と個人との發生的關係問題

社會と個人との關係と云ふ問題は、一切の社會的學問の根本問題或は根柢に存する問題にし

て、社會學が建設される以前からして、既に種々なる他の社會的學問に於て論究されて居た問題である。併し此の問題は種々なる方面から考察され得るもの、又考察する可きものにして、決して單純なる問題ではないのである。しかも其等の諸方面からの考察が屢々混同されて居るので、夫れが爲めに此の問題は夫れ自身當然あるより以上に一層複雑な又困難なものとなつて居る。それで此の問題を正當に解決するには、其等の諸方面をよく辨別せねばならないのである。尙ほ科學としての社會學から見る場合に特に肝要なるは、此の問題を如何なる方面から見れば、正當に科學的研究の問題として取扱はれ得るかを、豫め決定して置くことである。是れ此の問題は科學的に研究し得られる方面を有すると同時に、科學的には取扱はれ得られないので、只哲學的にのみ取扱はれ得る方面、否な哲學的に取扱はれねばならぬ方面をも有するからである。

今社會と個人との關係問題の諸方面を概觀すると、余は之を大體上左の四部類に別つことが出来ると思ふ。

- (一) 社會と個人との發生的關係、即ち社會が個人を作るか、又は個人が社會を作るか、又は此等二つの見方の外に如何なる見方があるかと云ふ問題。是れは社會及び個人の起源に關する問題である。

- (二) 社會と個人との歴史的及び現在の關係、即ち社會と個人との支配的或は規定的或は制約的關

係は、歴史的に如何にありしか、又現在の如何にあるかと云ふ問題。是れは社會進化及び文化發達の上から見たる社會及び人格の發達の問題である。

(三) 社會と個人との當爲的關係、即ち社會及び個人の最深本質の哲學的考究から見て、社會と個人との關係は本質的に如何にある可きものであるかと云ふ問題。此の問題は更に具體的に云ひ表はされると、今日の文化的及び經濟的に發達せる人間が、強制されずして自由に共存し協働し得る社會或は共同團體は、如何なるものである可きかと云ふが如き問題や、又人間が自分の意志から構成せる社會でなく、生れながらに依屬して居る社會或は共同團體に服従す可き本質的理由は、何であるかと云ふが如き問題となる。何れにしても此等の問題は實在の問題でなくして、當爲の問題である。

(四) 尙ほ吾人は個人は如何にして社會を認識し或は體驗するかと云ふ問題を、社會と個人との關係の一方面と認めることが出来る。是れは一の認識論問題即ち社會認識問題である。

社會と個人との關係問題の諸方面は、大體上右の四部類に別たれると思ふが、今其等の四部類の問題の中で、科學としての社會學が正當に取扱ひ得るのは、(一)及び(二)の二問題である。さうして(三)は哲學問題、(四)は認識論問題である。一般の見解に従ひ認識論を哲學の一學科と見れば、兩者共に哲學問題である。

人類社會に於ては動物社會に於ては見出れない(三)の如き哲學的問題の起るのは、是れ發達せる人間は個人或は個人格として、己を社會に對立させて考へ感じ行動する力を具有するからである。そうして是れが即ち動物社會は常に本能的に固定して居るのに反して、人類社會が進化し發達する根本的原因である。そうして如何にして個人が己を社會に對立させて考へ感じ行動するに至るかを、其の諸般の原因や又其の過程に就て研究するは社會學及び其の他の社會科學の任務にして、夫れは一般に(二)の問題の研究に於て取扱はれる。併し社會と個人との關係は本質上如何にある可きかと云ふ當爲問題は、只哲學のみの正當に取扱ひ得る問題である。

今社會學が正當に取扱ひ得る處の、否な取扱はねばならぬ處の(一)及び(二)の問題は、本來夫れ／＼獨立して居る可きものにして、吾人が(一)の問題を如何に解決するとも、(二)の問題の研究は毫も其の影響を受ける筈のなきものである。個人が社會を作ると見るにせよ、又社會が個人を作るを見るにせよ、歴史的にありしがまゝに兩者の關係を確定し、又現在的にあるがまゝに之を確定せんとすることには、何の關係もなかる可きである。併し實際に於ては(一)の問題に關して研究者の見る見解の如何は、彼自身の意識せざる中に(二)の問題の研究上に重大なる影響を及ぼすのである。かくて先づ(一)の問題に就て正當なる見解を立て、置くことは、(二)の問題の研究を正當に遂行する上にも重要な意義を有するのである。さればビオ・ソシャル假説が、(一)の問題を正當に解

決する上に如何に重要な意義を有するかを示すことによりて、吾人は又夫れが社會と個人との關係に關して社會學の取扱ふ可き問題全體の上に、如何に重要な意義を有するかを示し得るのである。

今社會と個人との發生的關係は、一般に個人が社會を作るか、又は社會が個人を作るかと云ふ問題として論究されて居る。併し此の問題をかゝる形式に於て論究するは正當でないと云ふ見解は、今日幾多の社會學者の唱へて居る事で、余も其の一人である。此處に先づ其の理由を明らかにする爲めに、右の形式に於て此の問題を科學的に論じ詰めて行くと、結局如何なる結果に了るかを示すこととする。

多くの社會は個人が相集りて任意的に創設せるものであることは、其の歴史を研究すれば明白である。又實際に吾人は日々幾多の社會が、個人によりて新たに作られて居ることを見るのである。かの教會の如きものは、多くの人々にとりては自から作れるものでなく、又自から任意的に加入せるものでもなく、彼等に對して始めから與へられたるものであり、又彼等は其の中に生れて其の中に生長したのである。併し歴史的に其の始源に遡りて考察すれば、夫れは始めには矢張り個人の任意的結合によりて、作られたるものである。否な幾多の迫害を受けつゝも、しかも之に抵抗して奮闘せる個人の團結によりて創設されたものである。尙ほ國家の如きも矢張り始め

は或個人によりて創設されたるものとして、傳説上傳へられて居る。それよりして一切の社會は個人が任意的に相集りて建設せるものであると見るは、何人にも理解され易き論理的結論であるが如くに見ゆる。

併し此の見解を論理的に推し詰めて行くと、一切の社會の成立するに先だちて、個人が既に個人として發達して居たことを前定しなければならぬ。そうして此の個人の社會前的存在或は發達が證明されるれば、此の見解は立派に成立し得るのである。併し夫れは證明し得られない。歴史的には云ふまでもなく、人種學的にも亦考古學的にも、夫れは證明され得ない。人種學的には如何なる蠻地に於ても、人間の存する處には常に社會の存すること、即ち人間は何處に於ても社會をなして生活して居ることが見出される。又考古學的には人間の遺跡遺物の發見される何處に於ても、矢張り人間は集團をなして生活して居たことが指示されて居る。更に種々なる事實に徴して、人間は人間の社會内に成長して始めて人間として發達するので、若し他の獸類の間に成長するとすれば、夫れは人間として發達し得ないものであることが理解される。要するに人間は人間の社會を離れて成長するも、尙ほ人間として發達するものでなく、人間の社會内に於て育てられ教へられて、始めて人間として發達し得るものである。されば社會前的個人、一層嚴密に云へば人間社會前的人間なるものは存在しないのである。

是に於てか吾人は、個人が社會即ち人間社會を作るのでなく、人間社會が個人即ち人間を作るのであると云はねばならぬ。併し此處に又問題が起る。抑々人間社會と云ふは、人間から成り立つ社會であることは云ふまでもない。隨ふて夫れは社會の成立前に人間の存在することを前定せねばならぬ。一定の時代に就て見れば、人間を作る人間社會の存在することは明白なる事實である。併し最始源まで遡りて行けば社會前に人間が存在して居て、其等の人間が始めて社會を作つたのであると推論せねばならぬ。かくて吾人は個人が社會を作ると云ふ見解に逆戻りせねばならなくなる。しかも人間社會を離れて、夫れ自身獨立に人間が人間として發達し得ない事は、上に述べし處によりて明らかである。要するに個人が社會を作ると云ふ説を批判的に論究して行くと、結局は社會は個人を作ると云ふ其の正反對説に到着せねばならないが、併し之れに反して社會は個人を作ると云ふ説を批判的に論究して行くと、結局は個人は社會を作ると云ふ其の正反對説に到着せざるを得ない。かくて右の如き形式に於て個人と社會との發生的關係問題を論究する以上は、吾人は只グル／＼循環するだけで、到底判然たる解決に達することは出来ないのである。そこで此の問題を右の如き形式に於ての外は、考察する仕方のないものゝ如く考へる社會學者は、此の問題を避けようとする。そうして其等の社會學者の論ずる處によれば、最とも根本的な或は最原始的な社會は、興へられたる事實である。社會學者は只興へられたる事實として夫れを認め、夫れから出發すればよいので、夫れが如何にして生起せしやは敢て問題とする必要はな

いのである。かくて其等の社會學者は幾多の最原始的人間社會或は人間集團を與へられたる根本事實として承認し、夫れが如何にして生起せしやは全く不問に附し、只夫れが如何に構成されて居るかを研究するだけに止め、そうしてそれより其等の最原始的人間社會が夫れゝゝ人口の増加によりて、又は一が他と結合し或は他を併合することによりて、如何に發達し行くか、更に其の發達に伴なふて其の内部に如何なる變化が生ずるかを研究するのである。

若し社會と個人との發生的關係問題は、上に述べし形式に於て呈出するより外に、之を研究する他の形式が存在せず、隨ふて到底正當に解決し得られないものならば、右に述べし社會學者の如き方針をとりて此の問題を避けるのは、正當な方法或は少なくも賢しき方法であるかも知れない。併し此處に余の問題とする事がある。夫れは其等の社會學者は表面上巧みに此の問題を避けて居る様に見わるが、果して眞實に此の問題を避けて居るかと云ふことである。そうして余の見る處によれば、其等の社會學者は只表面上此の問題を避けて居るだけで、實際に於ては此の問題に對して、社會が個人を作ると見る見解と同様な解決を下して居ると思はれるのである。此の事は其等の社會學者が上に述べし(二)の問題を、如何に取扱ふて居るかを見れば明らかに推知されると思はれる。要するに其等の社會學者は、(二)の問題を研究するに當つて、社會が個人を支配し或は規定し或は制約する方面は甚だ重要視して居るが、併し個人が社會を支配し或は規定し或は制約する方面は、殆んど看過して居るので、實際上社會が個人を作ると見る見解と、同様な結論に

到達して居るのである。

かくて社會と個人との發生的關係問題は、社會學上到底避け得られないものであると思はれる。されば此の問題を正當に解決し得られない様な形式に於て呈出することを避けると同時に、之を正當に解決し得る形式に於て呈出することを工夫するのが肝要である。然らば其の正當に解決し得る形式とは如何なるものであるか。是れ即ち余の修正せる意味のピオ・ソシヤル假説の立場から呈出される形式である。

ピオ・ソシヤル假説の立場から見れば、社會と個人との發生的關係の問題は、個人が社會を作るか又は社會が個人を作るかと云ふが如き形式に於て呈出さる可きものでなく、社會と個人との相互的影響の下で如何に相伴なふて發生し、更に發達するかと云ふ形式に於て呈出さる可きであるので、そうしてかゝる形式に於て呈出するに於て、吾人は始めて正當に其の問題を解決することが出来るのである。

余はさきに社會的現象と心理的現象とが、如何に相互的影響の下に於て發生し發達するかを、ピオ・ソシヤル假説の上から論述したが、此處に同一の相互的發生及び發達の過程を適用して、以て社會と個人との發生的關係を説明し得るのである。最早詳しく述べる暇はないから極簡單に愚見の大意を述べて置くが、要するに余は先づ人間に大に近づいて居るが、併しまだ嚴密には人間とは稱し得られない生物、即ち人類の祖先たる一種の類人猿が、社會或は集團をなして生活し

て居ると假定する。(但し此の假定は決して空想でないことは、諸種の類人猿の生活を觀察して察知される。)云ふまでもなく其の社會或は集團はまだ體制も明らかに具はつて居ない甚だ粗雑な、又結合力の弱いものである。併し其等の生物即ち類人猿が粗雑ながら社會をなして生活して居ると云ふことは、彼等の間の相互作用或は相互關係を段々強めてくる。そうして夫れにつれて彼等の各々の心意は段々人間的に發達し來り、又夫れに依て彼等は段々人間的となつてくる。夫れと同時に又彼等の社會或は集團は段々人間的となつてくる。此くの如くに彼等が段々人間的となるにつれて、彼等の社會が又人間的となると同時に、彼等の社會が段々人間的となるにつれて又彼等が段々人間的となつてくる。そうして同様な相互的作用が彼等と彼等の社會との間に進み行くにつれて、彼等が人間となり又益々人間として發達すると同時に、彼等の社會が人間的社會となり、又益々人間的社會として發達するのである。

余は右の如くに解することによりて、社會と個人との發生的關係が最も正當に説明し得られると考へるのであるか、然るに此の如くに解する方針を指示し、又其の説明の原理を與へるものは、余の修正せる意味のビオ・ソシヤル假説であるのである。以上社會と個人との發生的關係の研究に於けるビオ・ソシヤル假説の意義に就て述べしことは、甚だ簡單であるが、併し夫れによりて余は同假説が社會學上の根本的一假説として如何なる意義を有するかを、明らかに指示したと信するのである。(丁)